

宿縁

七月号

すべてのいのちを 見つめる眼を養う



百年時代といわれて、日本は長寿社会が当たり前といわれるようになりました。新聞広告にはいつまでも若さを保つためと健康食品や健康器具の広告がやたらと目立ちます。しかし年齢を重ねるとともに体のあちこちに支障が起きて医者通いが増えるのが実情です。肩こりも腰痛もたいていは「背骨が曲がっていますね!(変形)」と医師に告げられます。背骨はこの体を支える中心です。その中心が崩ればあちこちに影響を与えます。

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号
浄土真宗
本願寺派
中原寺
TEL 0477-372102 292
FAX 0477-372102 262

さて、私たちの体ではなく人生を歩む上での中心、つまりバックボーン(背骨)に据えるのは何でしょうか。それが宗教です。仏教です。阿弥陀仏の本願です。「すべての人を健全な境涯に生まれさせる」と誓われている願いとほたらきが「南無阿弥陀仏」という六字の言葉になって届けられている、それを常にバックボーンとすることです。それはゆるぎない真実(仏さま)の心で、何ものをもつてしても壊れない堅き心ですから金剛心です。わたしという肉体も私の思いも、残念ながらその時その場によって崩れてしまうからきわめて軟弱で頼りないと言わざるを得ません。「わたしはそんなものは抛りどころとしません。あくまでもこのわたし自身が頼りです!」という人がいれば、その人は単に「頑迷」の人です。子を憶う真の親の心というのは、「見返りを求めない一方的な慈しみのほたらき」です。煩惱にまなこさへられて撰取の光明見ざれども大悲ものうきことなくてつねにわが身をてらすなり (和讃) 仏さまのお心(誓い)を聞くことを「聴聞(ちょうもん)」といいます。そこに自ずと開かれてくるのが私の歩む人生の柱(バックボーン)となる私の誓いです。誰に対して誓

うのでしょうか。仏さまのお心を受け止めていく中で、一人ひとりがそれぞれに、念仏者としてどのように生きていけばよいのか、自らに問いかけ、いついかなる時も私とともに在る仏さまに誓うのです。それが私たちの次の四つの営みです。

- 一、自分の殻に閉じこもることなく、穏やかな顔と優しい言葉を大切にします。
- 一、貪り、怒り、愚かさに流されず、しなやかな心と振る舞いを心掛けます。
- 一、自分だけを大事にすることなく、人の喜びや悲しみを分かち合います。
- 一、生かされていることに気づき、日々を精一杯つとめます。

人びとの救いに尽くす仏さまのよう

に。

さあどうでしょう。こうした言葉の上っ面だけを読むと、「誰だつてそうありたいとは思っている」とか、「倫理道徳にすぎず世の中そんな甘いものではない」と反発しがちです。まさに「自分の殻を固くしている」・「しなやかさを失った生き方」の表れと言えるのではないのでしょうか。

先日、ある新聞の紙面の「生きるヒント昆虫に学ぼう」が目にとまりました。チョウやアリ、ゴキブリなど身近にいる昆虫。気持ち悪がられ、駆除されることも多い

彼らだが、五億年前から様々な天変地異や氣候変動を乗り越えてきたつわもので、生き抜くための驚くべき能力を持っている。コロナ禍で社会が激変するなか、昆虫に「生きる知恵」を学んでみるのはいかがだろうか。という呼びかけです。

「昆虫はもつとすごい」(丸山宗利、養老孟司、中瀬悠太の対談)という本も面白いです。第二章「社会生活は昆虫に学べ」でこんな発言があります。「昆虫をとおして生きものはこういうものなんだ、そして人間も例外ではないんだ、と知る。認めることから始まる」と発言しています。

これなどは親鸞聖人の人間観「人間というのは、欲や怒り、腹立つ心、妬みそねみなどの、塊である。これらは死ぬまで、静まりもしなければ減りもしない。もちろん断ち切れるものではない」という、事実を事実として引き受けて生きる道を歩み始めることができるのだと言えます。だからこそ「必ずそのままを救う」という阿弥陀仏の本願に出遇われたのです。

また同じく生物である「雑草」も「予測不可能な環境変化に対応する力を身につけた植物のエリート」だそうです。道ばたで見かけるオオバコは、人間や動物に踏まれるが、それを逆手に種子を靴底にくっつけて生育場所を広げる。スズメノカタビラは、ゴルフ場などでは刈られる高さより低くなるように、穂をつける位置を変える。逆境をプラスに変え、柔軟に対応する姿勢を教えてください。

これと同じように、仏教は一つの型にはめる窮屈ではなく柔軟な生き方の教えです。

【寺灯雑記】

○常例法座

6/20

六月の常例法座は、習志野市照光寺住職の脇本正範師にご法話いただきました。ご自身の病気やお父様のご往生をとおして、阿弥陀さまのお救いのなかに照らされたいのちであつたことへの気づきや喜びを、情熱的に伝えてくださいました。

○門信徒会役員会開催

6/20

今年度二回目となる門信徒会役員会が開催され、今後の法要や行事などについて協議がなされました。毎年夏に開催されるファミリーパーティーと夏休み子ども合宿ですが、新型コロナウイルス感染症の収束がまだ見えないことから、昨年に続き今年も中止する事が決まりました。十月の文化講演会については、今後の感染状況により開催か中止か判断することとなり、最新の情報は宿縁ならびに中原寺ホームページにてお知らせいたします。

また、今回は錦織弘武千葉石材社長に同席していただき、第二墓地に建設予定の合葬墓について完成予想図や完成までの日程などを役員に説明していただきました。

次回の役員会は十月二日午後三時より開かれます。

【仏事のイロハ】

○包みの表書きについて

年忌法要では、水引のついた包みが、いくつか用いられます。まず、施主側です。僧侶

への包みには「御布施」ないし「御法札（ごほうれい）」と記します。水引の色は年忌ですから、黄色のものを uses します。黒色の水引は葬儀から一周忌まで、赤色は初参式（赤ちゃんの初参り）や入仏式（お仏壇を迎えたいときの法要）。お墓を建てたときの建碑式も、赤色の水引です。

次に参詣者への引き出物（記念品）の包みには、黄色の水引で、表に「粗供養」「御供養」または「志」と記します。

年忌法要にお参りした参詣者は、黄色の水引の包みに、「御仏前」と書くのが一般的です。他にも「御香資」「御香典」なども記します。浄土真宗では、間違えても「御霊前」とは書きませんので、ご注意ください。

（探求社「浄土真宗の法事」より）

【人まかせにしない人生】

鎌田實（医師・作家）

○よりどころとなる場所

日本を代表する女優・吉永小百合さんと、最新作の「いのちの停車場」について対談しました。この作品で吉永さんは、主演作百二十二本目にして初めて医師役を演じています。

吉永さん演じる医師は、長年、救急救命医でしたが、故郷の金沢に帰り、在宅医としてたくさんの死と向き合っています。

八歳の小児がんの女の子は、全ての治療を試みたものの効果がありませんでした。医師は、「なかなか納得できない両親と、「死ぬって苦しい？」という女の子を連れて、海が見たいという女の子の夢を叶えます。

死の受容だけでなく、尊厳死、安楽死という問題も提起するこの映画。命の瀬戸際に立った時、自分ならどうするか、どうしてももらいたいかを考えるのに、とても良いヒントがあふれています。

この映画で、特に感動したエピソードがあります。それは、血圧も測らせてくれない末期がんの在宅患者と、その夫の物語。夫婦は「ゴミ屋敷」のなかで、二人だけで何かと支え合って生きてきました。しかし、老老介護でいつ破綻するかわかりません。

吉永さん演じる医師は、ゴミ屋敷を掃除することから始まります。家は以前の姿を取り戻し、夫婦の顔も明るくなっていきます。周りの人たちにも心を開き、最後は大好きな自宅で、陽だまりの中、夫に手を握られながら亡くなっています。

僕は四十六年間、在宅ケアを行ってきました。その経験から、「場のもつ力」をよく知っています。病院から一時退院して自宅に戻ると、患者さんが、別人のように生き生きしてくる。住み慣れた家の空気、匂い、音、家族やペットが近くにいる感覚、そういうものが混ざり合って不思議なパワーを生み出すのです。点滴などしなくても、そうした環境に身を置くことで、体や心の痛みを和らげることも珍しくありません。

自分らしい死は、在宅緩和ケアの充実が不可欠です。一人ひとりがあるべき姿を選択できるようになるためにも、在宅ケアの裾野がさらに広がることを望みます。

（「御堂さん」七月号より）

【法要・法座のご案内】

○婦人会法座

*七月三日(土) 一時

法話 前任職

「正信偈―道綽禅師」

○壮年会法座

*七月三日(土) 三時

法話 住職

「仏説阿弥陀經」解説

○常例法座

*七月十八日(日) 一時

布教使 網代豊和師(東松山市西照寺)

※七月の「教行信証を学ぶ」は休座

◎盂蘭盆会法要

並びに全戦没者追悼法要修行

*八月八日(日) 十時〜正午

法話・増田廣樹師

（ひたちなか市清心寺）

先人のみ跡をしたい、お浄土に往生された方々をおして、護られて生きるわがいのちの尊さに目を覚ます大切な法要です。皆様のご参詣をお待ちしています。

※「門信徒ファミリーパーティー」

（八月一日予定）

「夏休み子ども合宿」

（八月二十一日〜二十二日予定）は

新型コロナウイルス感染症が収束しないため今年も残念ながら中止します

【七月の掲示板のことば】

仏さまの まなざしは一人ひとりのちがいを認めてくれる